■蔵を改造した仕事場
作務衣姿で蚤を手に、仏像を掘っている
青年、鴨川。
その表情は暗く、芳しくない。
鴨川「駄目だ……まったくなっていない」
鴨川、蚤を乱暴に投げ捨てる。
鴨川M「俺は新人仏師として生活している。
仏師とは、仏像を彫ることを生業にしている人間のこと」
鴨川が彫っているのは、観音菩薩。
鴨川M「だがこの生きかたを選んでから、納得の行く仏像を彫り出せたことはない」
座り込む鴨川、腕まくりをして自分の右腕を睨む。
その腕は所々、機械のパーツが丸見えの義手。
鴨川M「この最新式の機械義手に、責任をぶつけているわけじゃない」
× × ×
回想、手術中のベッド。
鴨山M「かつての俺は、建設作業員だったが」
鴨川、鉄骨の落下事故により右腕を失い、緊急手術を受けている。
鴨川M「あの事故でこの義手を手に入れて以来、俺の指や手は、以前より器用になった」
× × ×
確かめるように、義手の指を動かす鴨川。
鴨川M「仏師を目指そうと思ったのも、この義手が生み出す芸術に興味を持ったからだ。
いや、義手に宿るAIと言うべきか」

■鴨川の自室
六畳ほどの和室。
ちゃぶ台に座り、台上のノートPCを眺める鴨川。
PC上画面で展開されるSNS。
さらに繊細な少女や、大自然を描いたAIアートの画像の羅列。
鴨川M「芸術の分野にAIが利用されるようになって以来、人間の予想を超越するアート

が多く生み出されてきた」
アート画像へのリプライ的なテキストには、『魂を感じない』『ぬくもりがない』との攻撃的な意見も。
鴨川M「AIを恐れる気持ちもわかる。だが俺は、俺の脳とシンクロしながら俺の想像を超えるこの義手に、可能性を感じていた」
指を見つめ続ける鴨川。
鴨川「だから納得できない問題は、義手や自分にあるのではないのかもしれない……そう」
× × ×
作業場、仏像になりかけの木材。
× × ×
鴨川「仏になるべき、仏の材料」

■山林
登山ルックで山の中を歩く鴨川。
鴨川M「俺の腕に見合った仏像の素材。それを俺は自分の足で探した」
鴨川、疲労に息を切らせている。
鴨川M「有名な話だが、彫刻家のミケランジェロは、掘り出すべきものはすでに『石』に宿っていると言った
× × ×
ミケランジェロの『ダビデ』像。
鴨川M「芸術家は、運命的に宿る『それ』を取り出しているだけだと」
× × ×
鴨川M「仏像も同じだ。山川草木悉有仏。仏は宿るべくして宿り、我々を待っている……」
歩き続ける鴨川、木々を眺めているが表情は明るくない。
義手も何やらぎこちない動き。
鴨川「この森も駄目か……」
そのとき突然、義手が強烈に振動しはじめる。
鴨川「……!」
義手の人差し指が不自然にぐいと曲がり、

左方向の奥を指差す。
おずおずと見る鴨川。
森林の中。
巨大で真っ黒に長く、葉までが黒い不気味な木が、周囲から浮いた形でそびえている。
鴨川「――これだ」

■作業場（翌日）
伐採した木材を前に、蚤を持つ鴨川。
置いてあるだけの木材から、異様なプレッシャーを感じる。
鴨川「この材料ならどうだい？　僕の右腕くん」
歯車がこすれるような機械音を鳴らし、動きはじめる義手。
刹那、蚤を握った義手が猛烈な勢いで木材を刻みはじめる。
鴨川「……！」
困惑する鴨川だが、活き活きと動く義手を見ている内に、高揚した表情を浮かべはじめる。
鴨川「いいぞ……！　この調子で、俺もイメージを掴もう！」
彫る、彫る、彫る。
鴨山「集中……集中するぞ……おん　まかきやらや　そわか　おん　まかきやらや　そわか　おん　まかきやらや　そわか……」
×　×　×
外は夜。
不眠不休で仏像を掘り続ける鴨川。
鴨川「とてつもない早さで、その仏は姿を表していった」
×　×　×
明くる日の鴨川、やつれながら一心不乱に掘り続ける。
傍らには数本の腕のパーツ。
鴨川「おん　まかきやらや　そわか　おん　まかきやらや　そわか　おん　まかきやらや　そわか……」

×　　×　　×

また明くる日、居眠りをしながら掘り続ける鴨川。
義手だけが自分の意思を持ったように、元気に蚤を振っている。
傍らには無数の髑髏のパーツ。
鴨川「おん まかきやらや そわか　おん まかきやらや そわか　おん まかきやらや そわか……」

×　　×　　×

さらに明くる日の夜、鴨川は蚤を握ったまま倒れている。
鴨川M「我を忘れたかのように仏像を掘り続けた私は、その日……」
窓から、満月の月日が差す。
その光に目を覚ます鴨川、ふと見上げる。
――月光に照らされる、漆黒の仏。
それは憤怒相の大黒天に似ているが、それよりもずっと禍々しい。
乱杭歯のような大量の牙、怒りに萌える複数の面、無数の腕が生え、全身に髑髏を纏っている。
歪に、あからさまに欠けている右手。
ゾッとする鴨川。
鴨川「な……なんだ……これは？」
鴨川を見下ろす、苛烈な仏像の顔。
鴨川「これは……俺はこんな、恐ろしいものを彫っていた……見い出したというのか？」
恐怖に後退る鴨川。
鴨川M「慄いた俺は、蚤を手放そうとした。この仏像を世に放ってしまったら――きっと途方もないことが起こる」
蚤から手を離そうとする鴨川。
鴨川M「だが」
鴨川の腕は、逆に蚤を握りしめる。
そしてぐんと腕を前に突き出し、仏像を求めて進もうとする。
鴨川「！　や、やめろ……！」
もうひとつの腕で義手を抑え込もうとする鴨川だが、義手がその腕を強く弾く。

その衝撃で派手に転び、倒れる鴨川。
鴨川「頼む、やめて……」
しかし義手は鴨川を引きずり、仏像に向かっていく。
鴨川「やめてくれぇぇぇぇ！！」
すでに別の生き物のような動きの義手。
そのまま義手は力任せにぶちぶちとゴムの拘束を破り、仏像に向かっていく。
鴨川「な……」
芋虫のように這う義手が、自ら仏像の体を登っていく。
愕然と見ている鴨川。
義手が仏像の体に、付け根を押し付ける。
すると、まるで元からそうだったかというように、義手が仏像の右腕として接合。
さらに仏像の全身が律動しはじめる。
鴨川「何が起きているんだ……!?」
仏像の額、瞳がカッと見開かれる。
その目が鴨川を冷徹に見下ろす。
絶叫する鴨川、弾けるように作業場を飛び出していく。
鴨川M「俺は必死に、自分の仏像から――自分の腕から逃げた」

■森林(翌日)
やつれた顔、片腕で彷徨する鴨川。
鴨川M「翌日、作業場を見に行ってみると、仏像も義手もなくなっていた」
× × ×
朝日を浴びる、空っぽの作業場。
× × ×
鴨川M「そして俺は、あの木を伐採した森に赴いたのだが……」
鴨川、かつて伐採したはずの木の近くへと辿り着く。
だがそこには無数の、沈黙する木々があるのみ。
鴨川M「そこには切り株すら残っていなかった。俺は本当に、ここであの木を見つけて伐採したのか……？」

唖然と森の奥を見続ける鴨川。
鴨川M「あの木が、自分を彫り出す誰かを待っていたのか。俺の義手――人とは異なる知性があれと一つになることを求めたのか」

■田舎の畔道（夜）
満月に照らされる闇。
鴨川M「今となっては、何もわからない」
機械の義手を剥き出しにし、全身を引きずるようにして、のそりのそりとあの仏像が歩いている。
鴨川M「あの仏像が、これからどこに行くのかも……」

了